

第十三章 堀河館の冬 — 義経

義経は、夜は盛んに酒宴を開いているが、昼間の検非違使の仕事は律儀に果たしている。法皇の期待を裏切りたくないのだろう、一日として休みを取らなかった。

義経は、法皇のいる院御所に出向く際は、立烏帽子を被り優美な直衣を着て桧扇を持って八葉車で行くし、警備で都大路小路を見回る場合には、引立烏帽子に白い鉢巻をし、赤銅色の鎧直垂を着て、黄金細工の太刀を腰に差し、手には軍扇を持って、黒い駿馬に乗って出かける。郷子は、義経が寛いだ水干姿から着替えるのを手助けしながらいつも危惧する。

(このような華やかな^{みなり}身形をして、法皇の寵愛を得かつ都の人々の人気を博している事を、鎌倉はどのように思っているのだろうか。きっとにがにがしく思っているだろう)

しかし、郷子は、義経にそのような懸念について、話せなかった。

(もし、わたしが、鎌倉の意向などを話せば、義経さまは、わたしを鎌倉の回し者だと誤解し、わたしを遠ざけて一切接触を断つに違いない)

郷子が思うに

(義経さまは、九歳まで一条長成の家で育ったから、平家の華やかで豪華な生活ぶりは、子供の目にも焼きついているはずだ。義経さまが、目指している最終目標は、平家を滅亡させて、その代わりに源氏がいままでの平家の位置に取って代わって朝廷の武家貴族として華やかで豪華な生活をする事なのではないだろうか)

郷子は、何かの際に、武士政権による幕府の創設という頼朝の革命的な考え方をそれとなく知らせたいと思い、二人で話せる機会を捉えては、しきりと、一条長成の家を出て、鞍馬山に預けられた後の話を訊いた。

「鞍馬山でどのような修行をされたのですか」

「俺を預かった東光坊^{れんにん}蓮忍は、牛若と呼ばれていた俺に^{しやなおう}遮那王と名づけた。遮那とは、仏の徳が広く世界に及ぶことを意味する。大層な名前を授かったものだ。東光坊は、俺が義朝の子供である事は知っていたはずだが、平家に復讐心を持つことがないようにという母の頼みで秘密は漏らさなかった。

俺は、なぜ自分が僧侶にならなければならないのか判らないままに、東光坊の教えを受けて、毎日経典を読み、写経をし、毘沙門天の前で読経した。こうして、十四歳の秋までひたすら学問に励んだのさ」

「それまで剣術の修行はなされなかったのですか」

郷子は意外な気がした。

「俺が、自分の出自を知ったのは、十四歳の秋に正門坊という僧侶が鞍馬寺に突然現われて教えてくれたからだ。この僧侶は、本名を鎌田正近といい、平治の乱で敗れた義朝の家来だと名乗った。彼は、源氏の系図を持っていて、俺にその内容を詳しく説明してくれた。

『源氏の祖先は五十六代清和天皇の御孫である経基の代になって、臣籍に降下して、源姓を賜った。それで世間一般に清和源氏と称されている。

その子孫、源頼義は朝廷から陸奥守に任じられ、鎮守軍将軍として、奥州を統括して反乱を起こしていた安部一族を破り陸奥・出羽地方を平定した。その戦の過程で、源氏は東国地方に多くの臣下を抱えて強力な支配網を確立するにいたった。頼義の子でその時代に活躍した世に名高い軍神八幡太郎源義家は、義朝の曾祖父である。

そして、清和源氏の嫡流である義朝には、九人の息子がいた。

平治の乱では、義朝とともに、十九歳の長男義平、十六歳の次男朝長、十二歳の三男頼朝が平家と戦った。長男と次男は戦死し、三男の頼朝は伊豆の蛭が小島に流された。四男義門と五男希義の所在は、良く判っていない。六男範頼は、遠江国の蒲之庄の荘官藤原季成に密かに育てられている。後は常盤の子供で、七男今若、八男乙若は寺に預けられた。そしてあなたさまこそが、義朝さまの九番目の御曹司牛若さまなのです』

それを聞いて、俺は雷に撃たれたように、周囲が白光に包まれ何も見えなくなったまま、体が痺れてしまってしばらく動けなかった。しかし、身体の中では、血が熱湯のように吹き上がってくるのが判った。それまでは、読経しながらいつも心の中でこれは違う、本当の俺ではないと叫んでいたから、真の自分が見つかって狂喜したのだ。この正門坊は、俺にこの話をする、煙のように鞍馬山から消えてしまったので、いまだにあれは夢だったのではないかと思うことがあるよ。その時以来、俺はお経をあげる代わりに平家の滅亡と源氏の再興を祈り、学問をすっぱりやめて、剣術の修行をする事にしたのだ」

「鞍馬山の天狗に剣術を教わったという噂を聞きましたが」

郷子は、いくら木刀を振っても、義経の身体に全くかすりもしなかったことを思い出した。

「ははは、鞍馬山に天狗などはいない。だが、鞍馬寺からさらに山奥に入ると僧正ガ谷というところがあり、その辺りは杉林が鬱蒼と生い茂り昼でも薄暗いところだが、そこには天狗が住み、夕日が西に傾くと妖怪が現われてわめき騒ぐという噂があって、誰も近づかない。

俺は、夜になると僧坊を抜け出して、その谷に通った。

わずかな月明かりはあったが、ほとんど真っ暗闇で、方角がつかめない。そのうえ道には杉林の太い木の根が露出しているから、昼間でもまともに歩くことさえかなわない剣呑な場所だが、そこを走った。

初めは、転んで体中が傷だらけになって、腫れあがり、うめくほど痛かった。

しかし、がむしゃらに続けていると、その内にその木の根道をまったく転ばずに全速力で走れるようになった。足を低く前に進めるから木の根に躓くので、要は飛び上がって進み、着地したらまたすぐに飛び上がるようにすれば躓かなくてすむことが判ったのだ。これを続けていたら、どんどん高くまで飛び上がれるようになった。それと、傾斜地に千年杉の大木があったので、これに清盛という名をつけて、木刀を持って上から駆け下りながら高いところにある幹を飛び上がって打ち、また下から駆け上がりながら飛び上がってその幹を打った。

また、竹の弾力を利用して、高い木に飛び上がる稽古もした。

その高い木から、むささびの真似をして木から木へ枝から枝へ飛び移るような修行もした。しかし、相手もなしに自分ひとりで剣術の修行に励んでも限界があることは判っていた。

ある日の夕方、やはり鞍馬山にあって靈験あらたかな神社といわれている貴船明神で、清盛への復讐と源氏の再興を祈願していると、通常は麓の僧坊にいる一人の僧兵が通りかかった。稚児僧の身形をして木刀を持っている俺を見て、不審に思ったのだろう声をかけてきた。『その木刀で某^{それがし}を打ってみろ』という。俺も自分の腕がどのくらい上達したか確かめる良い機会だと思ったから、遠慮なくかかっていった。千年杉の幹に対するように飛び上がって打ったが、身体にかすりもしなかった。その後、いくら木刀を振り回しても同じだった。俺が草臥れると、すばやく懐に飛び込んできて、俺を投げ飛ばした。俺は、すぐにその場で平伏して、『剣術を教えてください』と頼んだ。すると、その僧兵は、『もしやあなたは、正門坊が話していた、源氏の御曹司牛若さまではあるまいか』と訊いてきたので、『そうだ』と答えると、その僧兵はすぐに膝を折ると俺に向かって平伏した。自分は、源氏の侍だが平治の乱以降この寺の僧兵に紛れ込んで暮らしていたのだという。最近、正門坊から源氏の御曹司がこの寺に居ると聞いて捜していたのだが、貴船明神の靈験でやっとお会いできた。

しかも、すでに剣術の修行をしていると判って、感激した。この上は、自分が修行して会得した全ての術をお教えしますと約束してくれた。俺の剣術の基礎は、全てこの侍から会得したものだ。

俺は、色白で背が低く、着痩せする質だから弱そうに見えるが、その侍との稽古を通じて、俺の身体が猫のように柔軟性に富み、筋肉は人の数倍も力があって、人一倍高く飛べるし、素早く動ける事が判った」

郷子は、口元に笑みをうかべると軽く頷いた。（それは知っています）という意味だ。義経が裸になると、一見餅のように見える肌が隆起しているが、それは餅のように柔らかい肌ではなくて、こりこりとした筋肉であることが判る。

郷子は、すこし前であれば、頬を染めていたかもしれないが、もう幾度も肌を合わせた今では、そのようなこともない。

「その侍に一年ほど稽古をつけてもらおうと、その侍は、『もう自分の教える事はなくなりました』と言って、正門坊と同様に忽然と姿を消した。その侍は、自分は名のあるものではありませんと言って、最後まで名を名乗らなかった。そういう意味では、あの侍は天狗の化身だったのかも知れないと思うことがあるよ」

「その後、鞍馬山を降りられたのですね」

「鞍馬山はあまり高い山ではないが、それでも上に昇ると都が一望できる場所がある。ここで木に登って都を見下ろしながら、何時か平家を倒して、俺があつた都を支配してやると夢想していた。

金売り吉次と会ったのは、そんな時だった。

後からわかったのだが吉次は、京に大きな屋敷を構えて、砂金の売買をしている大金持ちだ。奥州から砂金を買ってきて、主に日宋貿易をしている平家に売っている。

こういう商売をしていると盗賊に襲われる事も多いから、常日頃、鞍馬寺の毘沙門天に安全を祈願しているらしい。

吉次も、知り合いの鎌田正近から、鞍馬寺に源氏の御曹司がいると聞いて、寺に参拝に来たついでに俺を探していたらしい。俺を見つけると『遮那王というのはあなたですか』と訊いてきた。俺が『そうだ』と答えると、すこし話したい事があると言って、こんな話をした。

『義朝の曾祖父八幡太郎義家は、朝廷に反逆していた奥州の安部一族と戦ったが、なかなか勝てずに苦戦していた。だが、戦に出羽の清原氏が加勢したことで、ようやく安部一族を破り、奥州を平定する事ができた。この恩賞で、清原氏は、陸奥と出羽の警護を任されることになった。その清原氏に内紛があり、清原清衡きよひらが八幡太郎義家の助力で勝者となって名を藤原と改めた。いま奥州を支配している藤原秀衡ひでひら公は、初代藤原氏清衡の孫で家来の数は十七万騎にのぼる。このように奥州藤原氏は、源氏と浅からぬ縁がある。今は平家の世だが、秀衡公は平家を快く思っていない。もっともいまのところは東国とも一線を画しているが、将来何らかの対策をうたなくてはならないと考えているようだ。

自分は、商売でいつも都と奥州との間を行き来しているので、もし、あなたが望むのなら、奥州に連れて行ってもいい。秀衡公も喜んで迎えてくれるだろう』

俺は、その頃、剣術の修行に熱中していて、これからどうするかなどまだ決めていなかったのだから、興味を持ったがその時は話を聞くだけで終わった。

俺は、昼間はぼうっとしている事が多くなった。お経にも学問にも身が入らなくなった。そんな折、俺が夜な夜な宿坊を抜け出して、僧正ガ谷で天狗に剣術を習っているという噂が広まった。東光坊は、誰かが俺に義朝の子供だと知らせたことを察したのだろう、剃髪して受戒させると言い出した。それが、俺の命を救うことになるのだという。それを聞いて、俺はすぐに山を降りる決心をして、その足で京の吉次の屋敷に行った。

俺は、その時十六歳だったから、鞍馬山には足掛け七年いたことになる。だが、未練はすこしもなかった。

吉次は、俺をすごく歓迎してくれた。『丁度良いところだった。あと十日もしたら砂金の買出しに奥州に行く予定だから、同行したらよい』という。そして、武士の衣裳も黄金造りの太刀も用意してくれた。ただ、吉次が、平家と商売している事がわかって、(なぜ、源氏の嫡流である俺を匿うのだろう。もし露見したら平家との取引に支障が出来るのではなからうか。なにか裏でもあるのだろうか) という疑問が湧いたが、吉次に頼る以外に選択の余地はなかった。

この頃、清盛は、平家の隆盛を妬んで公家や僧の間で平家を倒そうとする動きがあるのを察知して、髪を短く切って赤い衣裳を着せた十五、六歳の少年を使って、平家に不満を持つ者の動きを探らせていた。この少年達がかむろと呼ばれ、三百人はいたそうだった。かむろ

に密告されると投獄されて拷問を受けるから、都の人はかむろを恐れていた。かむろも実績をあげるために、すこしでも平家のことを話題にすると、それを針小棒大に言いふらして密告したから、都の人は、口をつぐんだ。平家に対する嫌悪感が都に充満していた。

俺は、かむろなどを使って、平家の悪口を封じているようでは、この平家の隆盛もそれほど長続きしないかと直感して、一層勇気が湧いてきたよ。

俺は、昼間は吉次の屋敷から一步も出なかったが、夜になると都の大路小路を徘徊した。子供の頃に暮らした母の居る一条長成の家の前まで行ったこともあるが、訪問すれば迷惑がかかるのでただ外から眺めただけだった。

弁慶に会ったのは、そんなある日の真夜中だった」

郷子は、武蔵坊弁慶とは披露宴で乾杯の音頭をとってもらってからも、酒席では必ず顔を合わせるし、それ以外でも話す機会が少なくない。それというのも、弁慶が義経にいつもべったりと寄り添っているために、寝所や着替えなどの私的な場所を除き、義経と話すときにはいつも弁慶が傍に居るからである。また、義経を見かけない時に弁慶に訊けば、義経の居場所はすぐに判った。

弁慶は、身の丈六尺五寸（1.95m）、体重三十四貫（127kg）という巨漢である。しかも、白麻の布で顔を包み黒墨の法衣を着た山法師の姿をしているので、否が応でも目立つ。容貌は、醜くはないが人並みはずれていかつく魁偉である。それに対して、義経は、身長五尺四寸（1.62m）、体重が十六貫（60kg）と小柄で派手な直垂を着て色白かつ眉目秀麗であるから、まったく対照的な組み合わせとっていいだろう。

そして、小柄な義経が、大男の弁慶に次々に命令をだすと、弁慶はそれに嬉々として従っている。奇妙な感じを受けるが、それは丁度、小さな子供が母親に我儘一杯に振る舞い、それを母親が愛おしそうに目を細めて従っているようなそんな風景と重なって見える。

郷子は、このような関係は、噂話のように単に弁慶が義経に剣術の勝負で負けて主従関係を結んだというだけでは説明できないように思う。二人を、このように惹きつけあうものはなんだろうか。郷子の興味はつきない。

郷子は、弁慶がこのように義経を愛おしく思っているのであれば、義経が静御前や貴族の娘やその他の女房などに取り巻かれて騒いでいるのを不快に思っているのではないかと考え、弁慶を観察したが、そんな素振りはない。むしろ、義経が女達と楽しそうにしていると、弁慶も嬉しそうである。

（弁慶は、義経が楽しそうにしているのを見ているのが嬉しいのだ。わたしも女達に嫉妬なぞせず弁慶を見習おう）と郷子は思う。

弁慶は、正室の郷子に対しても、不快な表情は見せないし、むしろ、郷子は弁慶から気に入られているのではないかと感じている。

弁慶は、その容貌から受ける印象とは裏腹に、話が上手で話題も豊富、とにかくよく喋る。口が悪くてずけずけ物を言っているように見えるが、それでいて微妙に人の心をくすぐる

ような事を言う。それに、細かいところにもよく気配りを働かせて、困っている時などさりげなく助けてくれる。礼を言うと「おれは知らん」と言って、かえって怒ったふりをする。ただ、誰かが義経と同じような口調で命令したりすると、それこそ血相を変えて本気で怒るから、非常に危険である。

郷子の場合も同様で、義経の正室であるという甘えは許されない。弁慶も、義経の正室だからといって、義経に対するのと同様な主従の態度は取らない。

しかし、この点に気をつけてさえいれば、郷子は、弁慶には何でも心置きなく話せそうな気がして、すっかり好きになってしまった。

弁慶の生い立ちについては、志乃が何処からともなく仕入れてきて、話してくれた。志乃の情報網は、たいしたものだ。

「弁慶殿は、戦では『某は、熊野の別当湛増たんぞうの子、比叡山西塔の武蔵坊弁慶である』と名乗っているそうです。聞く所によるとなんでも、湛増が、熊野詣にやってきた二位大納言の姫君を強引にかどわかして遁走し、産ませた子が弁慶殿だそうです。生まれたときにあまりに大きく毛も黒々と生えていたので、胎内に十八ヶ月もいたという噂話があります。容貌があまりにも怪異だったために父親の湛増が鬼子だと嫌って、山中に捨てたそうですが、湛増の妹が拾って鬼若と命名して京で育てたそうです。幼少からあまりに乱暴なために、比叡山西塔の僧正に預けられますが、そこでも、暴れまわるので、とうとう衆徒に訴えられて山門を追い出されたそうです。そこで、自ら髪を剃って出家して、西塔の武蔵坊弁慶と名乗るようになったのだということです。その後、諸国を放浪しましたが乱暴は収まらずに播磨国の書写山園教寺の僧兵と喧嘩してその堂塔を炎上させたため一時追われていたとかいうはなしです」

これを聞いて、郷子は弁慶の義経に対する気持ちやすこし判るような気がした。

（弁慶は、あまりに大きく容貌が怪異だったために親には捨てられ、比叡山では冷たく邪険に扱われ、世の中すべてを敵として暴れまわっていたが、義経と出会って初めて、自分を正当に扱ってくれる人を見つけたのだろう。それと、二人とも孤独だったので、魂が触れ合ったのかもしれない）

郷子は、酒席でさりげなく弁慶に訊いてみたことがある。

「弁慶殿は、義経さまと相性が良いようでございますね」

「相性？、相性というか、某は、判官殿あつての弁慶だと思っているからな。

判官殿のいない弁慶などクソも同然さ。誰も鼻も引っ掛けないだろう。判官殿の側近であるからこそ、世間に遍く怪力無双の武蔵坊弁慶として知られているし、某の事が巷で話題になる。検非違使の判官殿の命を受けて、俺が指示をだせば何百人という武士が動くし、市井の人も恐れ入る。貴族からでさえ一目置かれる。これも源氏の嫡流判官殿の後ろ盾あつてのことで、判官殿がいなければ弁慶もないのさ」

（弁慶は、自分が義経という光の影であるという立場を正しく理解しているのだろう。大江広元や三善康信が義経にたいして言いたかったのも同じようなことかもしれない。

例え血の繋がりはあっても義経は頼朝という光で出来た影に過ぎない)

郷子は、用心深く訊いたことがある。

「義経さまとの出会いは、どのような？」

弁慶は、郷子をじろりと見てから言った。

「真夜中に小童^{こわっぼ}が黄金造りの立派な刀を差して、五条大橋の真ん中をえばって通るから、『ちょっとその刀を見せてみる』と言ったのさ。そしたら、小童が『取れるものなら取ってみろ』と生意気をいうものだから腹が立ってこらしめてやろうと、掴んで捻り潰そうとしたら、もうそこにはいないのさ。

やむなく薙刀で殴ってやろうと振り回したが、振っても振っても体にかすりもしなかった。とにかく、暗くて姿がよく見えないうえ、素早く飛び上がったり、跳びはねたりして動き回るものだから、何処にいるのか見当もつかない。一休みすると扇子で頭を叩かれる。

腹が立ってまた薙刀を振り回すがもうどこにも見当たらない。何時までやってもきりがなから戦うのが馬鹿らしくなって止めてしまった。だから、降参はしたが、負けたわけではない。某は、自慢じゃないが、判官殿に会うまでは力自慢では負けたことがなかったから、すくなく動揺したが、腕力が使えない天狗のような奴には勝てないと諦めたのさ。小童が、疲れた果てた某の前に来て『降参なら俺の家来になれと』と言うから、(この餓鬼ふざけるな) と思ったが、こんなかわいい小童の家来になるのも前世の縁かも知れないと思ひ直して『負けたわけではないが、家来になってやっても良い』と答えたのさ

「弁慶殿が、刀を千本集める祈願をたて、京で道行く侍から刀を九九九本奪ったという噂を聞きました」

「言っておくが某は、追剥のような盗賊ではないからな。恐らく琵琶法師などが話を面白くするためにでっち上げた作り話だ」

郷子は、三善康信がかつて言った言葉を思い出す。

「もう一つ懸念しているのは、むかし義経殿が世話になった奥州の藤原氏から正室を貰うことです。この可能性はかなりあります」

郷子は、義経がもう自分を本当に信用してくれているのかどうかまだ確信が持てなかった。あまり根掘り葉掘り訊くと、頼朝の間諜と疑われるのではないかとそれが心配だった。特に、奥州藤原氏のことを訊くのは躊躇した。

郷子は、義経に婉曲に尋ねてみた。

「弁慶殿は、義経さまと一緒に奥州に下ったのですか」

「いや、弁慶は都にとどまってもらった。平家の情勢を知るためだ。金売り吉次が都から奥州に下る時は弁慶がいつも俺宛の報告書を託してくれた。弁慶は、ああ見えて律儀な男だ。若い頃流浪したから世の中の事を良く知っている。頭もいいし、文章も上手い。だから報告書は役に立った。兄が挙兵したのを知ったのも彼の報告書のおかげなのさ」

「奥州への旅はいかがでしたか」

「金売り吉次の一隊は、都の商品を奥州まで運ぶ吉次の家人だけではなく、山賊を避けるために途中の国まで同行する僧侶や女房や商人も含まれるから、二百人を超す大部隊だ。俺もそれらの種々雑多な人たちの中に潜り込んだから目立たなかった。道は、草津を通過して東山道八十六駅を行く。最初の宿泊地は近江の鏡の宿だった。部屋で休んでいると、六波羅の平家の侍が鞍馬山から逃げた稚児姿の遮那王という少年を捜し回っているという声が聞こえてきた。それで、考えた末に、自分一人で元服する事にした。元服の式は、男にとって最も重要な儀式で本来は一族郎党打ち揃って厳粛に行われるのが普通だが、誰もいないのでいたしかたなかった。自分で髪をすいて麻糸で元結を結び、用意していた折烏帽子を被った。八幡太郎義家の故事に習って左折とした。それから、遮那王の名を捨て、先祖の名前を参考にして、源九郎義経と名乗る事にした」

いつも明るい義経が、その時のことを思い出したのか、神妙な顔をした。

（七歳で捨て子のように鞍馬山に預けられ、十六歳で逃げだし、追っ手を掛けられる身で、一人で元服した義経さま。その寂しさや孤独感は何ほどのものであったのだろうか）
郷子は、胸が締め付けられ、目頭に熱いものを感じた。

（この人を胸にそっと抱きしめてあげたい）

そして、はっきりと感じた。

（わたしは、この人に恋をしている）

義経は、それを感じたのかどうか、また、明るく話し出した。

「その日の夜、驚いたことに金売り吉次の荷物を狙って二十人ほどの盗賊が宿に侵入してきた。吉次も武者姿をしていた家人もみんな臆病者で逃げてしまった。

盗賊は、ほとんどがこけおどしのために馬鹿でかい薙刀をもっていたから、狭い宿屋の中ではうまく動けないのさ。それで、俺が飛び回って盗賊を五人ほど切ってしまったら、他の盗賊はみんな逃げてしまった。

次の日の朝に、宿場のはずれに、盗賊五人の首を掛け、捨札を立てた。

捨札には、こう書いた。

音にも聞け、目にも見よ

五人の盗賊を成敗した者だが、仔細あって名は明かせない。

京の金商人吉次に縁のあるものである。

これらの首を元服後の初手柄とする。

詳しい事を知りたいければ、鞍馬山の東光坊のところへ行って問うべし。

平家の追っ手に、知られる恐れもあったが、それより元服を世間に公表したかったのだ」

郷子は、義経の心が判るような気がした。

（この人はきっと名を名乗りたかったに違いない。五人の盗賊を成敗したのは、清和源氏の嫡流源義朝の九男、元服名は源九郎義経であると）

「坂東に入った時、そこに知り合いがいることを思い出した。

知り合いといっても、俺が鞍馬山で剣術修行をしていた時に、正門坊に聞いたのか俺を訪ねて来て『自分は、源氏のご恩を受けたものである。名を深栖^{ふかすのみぎのすけ}陵助といい、御陵の管理人をしている。近くを通った時には、ぜひ自分の屋敷に寄って欲しい。』と言った。俺はわずか一人でも知り合いがいることを思い出して嬉しくなった。それで、吉次が止めるのも聞かず、後で追いつくからと説得して吉次の一行と別れた。

人づてに聞いてその屋敷に行ってみると、立派な屋敷だった。家来も多そうだし、この人物が援助してくれたら心強いと感謝の気持ちで一杯だった。

源九郎義経と名乗ると、とにかく家には入れてくれたが、陵助は非常に迷惑そうだった。

俺に茶を出した後、隣の部屋で郎党に聞こえよがしに言うのが聞こえた。

『屋敷に寄って欲しいとほんのご愛想で言ったら、まともに受けて尋ねて来た馬鹿がいる。平家に知られたら事だから明日の朝には追い出せ』

そして、食事も出さずに土間に藁を敷いて、ここで寝ろと言った。

俺は、真夜中に起きると、松明を作り、まず、厩から一番いい黒馬を一頭選ぶと残りの馬は全て柵を開放して外に逃がした。それから立派な武家屋敷の母屋から厩からその他の全ての建物に火をつけてやった。その黒馬に乗って、陵助が出てくるのを待っていると、陵助が裸に近い格好で、これもほとんど裸の女とあたふたと母屋を飛び出してきた。

その陵助に向かって『源九郎義経を見下す罰当たりには、天誅を加える。思い知ったか』と大声で叫ぶと、馬に鞭をくれたのさ」

義経は、唇をきつく結んだ。きっとその時の悔しさを思い出したに違いない。

義経は、一見おとなしそうに見えるが、その実大変な乱暴者なのだということが良く判る。

（義朝さまの血を引いているのだ。常盤御前も牛若には、きっと手を焼いたことだろう）と郷子は思う。

「しかし、捨てる神あれば拾う神ありとは、よく言ったものだ。吉次に追いつこうと、上野国の板鼻というところについた時のことだ。夜になって泊まる所を探していると、粗末な家ばかりが並んでいるなかで、一軒だけ風情のある瀟洒な家を見つけた。そこで宿泊を頼んだら、十七、八の娘が『主人が留守なので泊められません』と断った。『いつ帰るのですか』と訊くと、『夜中にならないと帰りません』と答える。『では、それまで庭で待たせてもらってもいいですか』と訊くと『それは、かまいませんが、主人は恐い人だから止めた方がいいですよ』と忠告する。他に泊まる場所もないから、馬を繋ぎ、庭で休んでいると、明け方近くになって、主人が帰ってきた。まだ若そうだが髭面の顔で、薄青い直垂に、萌黄おどしの腹巻をして、太刀をさし、大きな鉾を手に持っている。その後に、屈強な若者四、五人が、まさかり、大鎌、薙刀、手斧、大鉞などを持って後に従っている。なにか、荒っぽい大仕事をして帰ってきたような興奮に包まれている。

主人が、止めてある馬を見て、俺に気がついた。

『この黒馬は、お前のか』と訊く

『そうだ』と答えると

『この馬は知ってるぞ。陵助のところにいた駿馬、黒天竜だ』

俺が黙っていると

『陵助の屋敷に火をかけたのは、お前だな』と睨みつける。

俺は、用心していつでも刀で応戦できるように構えた。

すると驚いた事に、その主人が

『こんなところでは、話もできません。どうぞ、家にお入りください』

と丁寧な口調で言った。

その後、豪華な食事や酒でもてなしてくれた。

聞くとところによると、陵助が、源氏の小童こわっぼに火をかけられたと騒いで、家来がその男を追っているらしい。

『ここにいれば大丈夫です』と主人は言って、三日間も供応した後に、『家来にしてください』と頼むから、家来にしてやった。これが、伊勢三郎義盛さ

郷子は、弁慶とともにいつも義経に従っている髭面の武士を思い浮かべた。

(伊勢義盛殿は、弁慶が紹介したようにやはり盗賊だったのだ)

「伊勢殿と御一緒に奥州に行ったのですか」

郷子は、当たり障りなく訊いた。

「義盛は、自宅に残して奥州藤原氏には一人で訪ねて行った。陵助のことがあるから、本当に藤原氏が俺を受け入れてくれるのか非常に心配だったのだ。だが、それは杞憂だった。藤原秀衡殿は、俺をまるで実の子供以上に愛してくれたよ。それで嫡男の泰衡が俺に嫉妬していたくらいだ。俺は六年間平泉で過ごしたが、三男の忠衡とは仲良くなったが、泰衡とは最後までうまく行かなかった」

義経は、あまり多くを語ろうとしなかった。

郷子は、武蔵坊弁慶と伊勢三郎義盛のことについて考えてみた。義経は、十六歳の時に二人と口頭で主従関係を結んだ。その後義経が平泉で過ごした六年間は一度も会っていない。義経が黄瀬川宿で頼朝と対面した時には、二人は従者として付き添っていたようだから、なんと二人は、六年間もひたすら義経が主君として戻ってくるのを待っていたことになる。郷子は、感銘を受けた。

(荒法師と盗賊、義経さまは、ある種の人たちにとってはそれほど魅力的な存在なのだ)